
告白の言葉

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白の言葉

【Nコード】

N9625X

【作者名】

どんぐり

【あらすじ】

「ライトノベルのタイトルって、ダサいのが多くない？」

あたしのそんな何気ない問いをきっかけにして、悠馬の語りが始まった。

それはさておき、告白するならどんな言葉を使う？ そんなものはひとそれぞれだけれど、悠馬はあんなことを言った。

(前書き)

少し前に書いた、『異世界転生してみたい?』のキャラが登場しますが、これだけ読んでも問題ないものになっています。

最初の三分の二ほどは恋愛要素ほぼなしですが、恋愛ものということにしておいてください。

「ライトノベルのタイトルって、ダサいのが多くない？」

学校帰りに立ち寄った書店にて、あたしはたまたま（マジだから別に後をつけたりしてない）居合わせた悠馬に何気なく尋ねた。

「……それをはっきり言ってしまうのか」

悠馬は苦笑いしながら溜息を吐いてしまった。何か触れてはいけないことだったろうか？

「なんかまづかった？」

「いや、別にいいんじゃない？ 結構多くの人が思ってることだろうし。ネット上でも色々意見が飛び交ってるみたいだし。」

ただ、改めて訊かれると困るんだよな。ダサイよな、って同意したとしても、じゃあ他にどんなタイトルがあるのかを考えると、案外いいものがない。存外に良いセンスしているのかもしれないとも思ってしまう。ダサイよな、そうでないよな、なんともよくわからない」

「まあ、あたしがタイトルを考えても、更にダサイものになるか、修辞過剰なものになりそうではあるよね。けっこう絶妙ないところをいつてるのかも？」

ふうむ、と唸って、目の前に広がる平積みのライトノベルたちのタイトルを読む。『俺の妹がこんなに可愛いわけがない』『キノの旅』『R-15』『灼眼のシャナ』『パパのいうことを聞きなさい！』『エトセトラエトセトラ。』

何となくいい感じのものもあるけれど、何これ？ っと思ってしまうものもある。

「変なタイトルってさ、狙ってつけてるのかな？」

「それはそうだろうね。作家も編集の人たちも、できるだけ売れるように努力しているはずだ。これも一つの戦略なんだろうな」

「戦略ねえ……どんな？」

尋ねると、悠馬の目が一瞬、きらーん、と光った気がする。この閃き具合には覚えがあった。悠馬が何かを語ろうとしているとき、こんな具合に目が光るのだ。

悠馬は常々色々と考えてはいるのだけれど、ほとんどを胸の内に秘めたままにしている。語ったとしても、誰も興味を示さないであろうことを知っているからだ。ただ、あたしは人の（ということにしておこう）話を聞くのがわりと好きなので、悠馬の話を聞くのにやぶさかではない。

いいのかな、やめとこうかな、という迷いが見え隠れする悠馬の目を見返し、あたしはなんだかおかしくなって笑ってしまった。

「……なにゆえに笑う？」

「あー……うん、気にしなくていいよ。で、何か考えてることがあるなら聞くよ」

あたしが若干呆れながら言うと、悠馬が苦笑。

「これもまた正しいなんていう証拠はないことだけだね」

「あんたに正解がわかるなら、とっくの昔に誰かが言ってるよ。それに、学校の先生がするみたいに模範解答を誇らしげに語られるより、間違ってもいいから自分で考えたことを語られる方が、こっちとしてはずっと聞きたいがあるよ」

「……そうかな。じゃ、話すと長くなるかもだから、少しここから離れようか」

「おう、わかった」

あたしたちがライトノベルの置かれた一角を退くと、後ろに控えていた高校生がやってきて新刊を物色していた。ついでに、スーツを来た中年のおっちゃん、その一角を見ながら眉をしかめてスタスタと通り過ぎていった。まあ、中年のおっちゃんにはあの一角は合わないだろうね。普通に大人が読んでも面白くて、一般書籍（とっていいのかな？）より含蓄のあるものはたくさんあるけれど、あのタイトルと表紙絵じゃあね。ちよっと近寄りがたいよね。

悠馬の誘いに乗り、あたしはこの書店が入っているデパートの屋上へとやってきた。このデパートは九階建てなので、高さにすれば十階となる。十月の半ばとあって、晴れ渡った青空の下でも、気温は少し低めで風もやや冷たい。寒いという程ではないのだけれど、そんな屋上に来ようとする人はあまりいないようで、人影はまばらだ。

屋上には、お子様用の遊技場と、五つくらいの小物屋さんがあるが、さっきも言った通り人がいなくてもものさびしい感じ。経営は大丈夫なのかな？ と余計な心配をしつつ、あたしは悠馬に導かれるまま、隅の方に設置されたベンチに二人並んで腰掛けた。

「それで、話の続きだけど」

「うん。どうぞどうぞ」

あたしが促すと、悠馬は滔々と語り始めた。

「僕が知ってるライトノベルは電撃、スニーカー、ファミ通、富士見ファンタジアくらいだから、ラノベ全般の話はできない。それは始めに断っておく。それで、僕の知る限りでは、ラノベって基本的には男向けだと思う。主人公は男が多いし、ハーレムものはあっても逆ハーものは普通ない。女キャラもだいたい男が好きになりそうなやつばかり。ラブコメはあっても恋愛一辺倒のものはないし、百合はあっても薔薇はそうそうない」

「言ってることはわかるよ。あたしもラノベ全般を読んでるわけじゃないからはっきりと、男向け、とは言えないけど」

「うん、全体を見ればいろいろあるだろうけれど、それはひとまず置いておく。」

それでさ、僕が思うに、男は洒落ていたり修辭に優れていたりする言葉があまり好きではない。そういう言葉なんかには、一種の嫌悪感、それが言い過ぎなら、近寄りたさを感じるんだ。

ほら、少年ジャンプの漫画なんかだと、言葉巧みな主人公なんてほぼ皆無で、言葉でごちゃごちゃいうよりその気持ちや情熱は行動で示す、というのが好まれる感じだ。口が達者なキャラは、口先だ

けの軟弱者として描かれることも多いね。口先ばかりのやつなんて信用できない、態度で示せ、というところかな? 『ワンピース』も『ブリーチ』も『ナルト』も『ハンター×ハンター』も、技名は別にすれば、主人公たちは普通の言葉しか口にしない。さらに、ここぞという時の大事なセリフは、大抵ストレートで単純な言葉だ。セリフにひねりはなくても、代わりに男の生きざまを見せているからカッコイイ」

「んー……『ワンピース』だと『自分の命をかける覚悟だ!』とか、『仲間だ!』とか? そんなこと叫んで、強大な敵に挑んでいく……。あー、そういえば、『ブリーチ』のエスパーダたちってやたらとくどいセリフ吐いては死んでいったね」

「うん、そんな感じ。」

ついでに言ってしまうと、そもそも男は言葉を操るのが苦手な面がある。そのせいで、自分にはできない、言葉を巧みに使う者たちに嫉妬して好きになれないのかもしれない。そうでないにしても、詐欺師っぽい、女ったらし、という悪い印象も持ってしまうのかも。と言いつつ、技名やその前振りには何かとひねりの利いたものは多いし、そういうのは好きだ。ただ、そういうのをとおっぴらに叫んでいると恥ずかしいだけ、というくらいの認識は、中高生くらいにはあるだろう。技名を叫んだりして、漫画を真似て遊ぶのは小学生までだと思う」

「そういえば小学生のころに何やら技名を叫んだ男子はいたな。ちょっと懐かしい。ついでに、中学生も戯れではそんなことやってたよ。剣道部とか、竹刀の乱れ突きしながら『アキサザメ』とか叫んでた気がする」

「あー……こっちにもいたね、そういえば。でもま、それはウケ狙いで、カッコイイとは思ってないから大丈夫。うん。っていうかそれはゲームの技名だね。よく知ってるなあ」

「あたし、ゲームもそれなりに好きだし。テイルズ系は特にね。で、話がそれたね。続きをどうぞ」

悠馬は、うん、と返事はしたものの、少しの間言葉を途切れさせた。考えをまとめているのだろう。橙が混じり始めた空を眺めつつ、あたしは悠馬の言葉を待った。

秋風がそよよと吹いて、悠馬の男子にしては繊細な印象のある柔らかな髪がなびく。

いつからだったかな、この人を好きになったのは。高校生になっても頭の中は小学生みたいな男が多いな、と生意気なこと考えていたのは、高校一年のとき。二年生になり、悠馬と知り合っているんな話をするうち、高校生男子も捨てたもんじゃないと思えた。まだまだいたらないところはいくらでもあるし、よく考えているようにで抜けているところもある。けれど、それがまたあたしには好ましい。既製品の答えを与えられるだけじゃない、自分から手さぐりで見つけていく姿勢が、いいなと思う。

懐かしさと共にしみじみしていると、悠馬は再び口を開いた。

「……ライトノベルを読む年齢層って、中学生からぎりぎり三十歳くらいまでだろう。小学生までだと、まだ多くの漢字を知らないから読めないものが多いし、好んで読むのは小説よりヴィジュアルの充実した漫画。だから、そもそもこの年齢層を読者とは見ていないと思う。

そして、僕はまだ十七だから想像だけれど、だいたい三十歳以上にもなるとラノベ的な展開には魅力を感じないと思う。ラノベの主人公が大抵中学生や高校生だから、主人公の悩みの種は、自分とは何かとか、恋って何だとか、学校ってなんのためにあるんだとか、そういう青臭いもの。中年にはもう共感しにくい話題だろうな。そんなことより、親のありかたとか、会社の人間関係とか、大人の複雑な恋愛を描いたものに関心があると思う。

それに、ひよっとすると、暢気に学校に通っていたり、無責任に遊び呆けたりする様を見るとイライラするのもかもしれない。自分はせつせと働いているのに、子供はいいよなあ、なんてさ。もっとも、あの頃はよかった、なんていう懐かしさと共に読むかもしれないか

ら、微妙なところかな」

「んー、でも、結構大人が読むに堪えるものもあるんじゃない？」

「ああ、確かにね。主人公には中高生が多いとはいったけれど、かといって、青臭い悩みを抱えた者ばかりじゃなくて、現実の厳しさを描くような深い作品もある。だから、ライトノベルは三十以降の人には向かない、と言いきることはできない……でも、やっぱり、体面とかを気にしてしまうのかもしれない。ライトノベルを読んでいるというだけで印象が良くない可能性がある。いつだったか、政治家とある漫画を読んでいただけで何かと意見が飛び交ったように……って、こんなこと言ったらもう話が終わってしまうな」

「だね。あ、でも、あたしもたまにラノベ読んでるだけで『オタク』って言われる。別に『ラノベを読む』イコール『オタク』じゃないのにね。ラノベ読まない人にとっては、真性の『オタク』もただのラノベ読みも一緒に見えるんだろうね」

「だろうね。僕たちが、ニューヨークに住む人もニューオーリンズに住む人も、アメリカ人とひとくくりにしてしまうのに似ているかもしれない。よく知らないと、全然違うものも一つに見えてしまうものだ。」

と、また話がずれたな。

……これはラブコメに関しての話だけど、三十くらいだと、すでに結婚している可能性も高い。奥さんがいるのにラブコメを楽しむのは気まずいところがあると思うし、万一奥さんと上手くいっていない場合には、恋愛に対して純情な夢を見ることもできないだろう。ラブコメな恋愛の後に好きあう二人が結婚して幸せな家庭を築きました、めでたしめでたし、なんてことにはならないと痛感している頃に、あの類はあまり楽しめないんじゃないかな。

というわけで、三十歳くらいより上の年齢層はあまり読者層として相応しくないだろう。年齢層を定めて出版するのも立派な商業戦略の内だ。三十歳以上に好かれなかったって、何も気にすることはない」

「ふむ。誰にでも面白い作品なんてない、っていうことか」

「そういうことにもなるんだらうね。」

それで、ラノベの読者の年齢層はそれでよしとしよう。次に、男の言語感覚についてだ。

中高生、大学生辺りまでは、多分男は豊富で知的な語彙を重宝しない。けど、それ以降には感覚も変わって来ると思う。単純すぎる語彙には至らなさを感じてしまうんじゃないかな。社会に出て、上司や先輩や取引先の人たち、あるいはお客さんたちとの幅広い交流も盛んになるころになれば、流石に中学生的な語彙だけを駆使しているのが幼稚に見えてくるだろう。敬語をまともに話せない奴らはバカに見えるし、同年代だけで通じる略語も正確な意思の伝達に向かなくて鬱陶しくなるし、言葉足らずはコミュニケーション能力が不足していると映る。そして、理知的で小難しい言葉が心地よく聞こえるようになるんだ」

「あたしの父親は、たまに言うよ。そんな言葉遣いはやめなさいとか、今時の高校生はまともに日本語が話せないとか」

「そう言いつつ、たぶん今のお父さん世代も、高校生時代にはまともに日本語を話していなかったと思うけど。そして、お父さん世代の、更にも上のお父さん世代の人には、バカみたいだと思われていたに違いない。『最近の若いものは……』っていうのは、有史以前からいわれていたことらしいし。」

もっとも、時代によっては、とにかく難しい単語を使うのが美德とされていたことだってあったと思う。民主主義だとか、個人主義だとか、そういうのが流行った時代かな。でも、そういうときには逆に、難しい言葉にかぶれた似非思想家みたいにいわれていたと思うよ。自分だけにわかる言葉を使い、自分の賢さに酔って悦に浸るバカ、なんてさ。結局、どっちもどっちだよ」

「んー、言われてみるとそんな気がする。人間って今も昔もたいして変わらないんだね。方向性が違うだけで」

「ま、そういう時代はさ、小難しい言葉を駆使する息子を見て、父

親はよく勉強しているなあと感心したかもしれない。でもその陰で、母親なんかは、本当に意味がわかってるんだろうか、ただ周りに感化されているだけじゃないか、小難しいこと考えてばかりで自分の生活をないがしろにしてはいないだろうか、って不安だったんじゃないかとも思うね。

……と、またずれた。で、結局何が言いたいかと言うと、ストリートでわかりやすい言葉は現代の若い男らしいってことね。それをタイトルに反映すると、少しダサイくらいのものになるんじゃないかな」

「お、やつといきついた」

と言うと、悠馬は苦笑い。

「あ、でもまだ続くんだ？」

悠馬は何かを語りそうにこちらを見ている。

「ええと……あと少し、かな」

「じゃ、どうぞ」

「うん……。あと、女の子は女の子で言葉に対する感覚が違っていると思う。意味深な言葉とか、甘い囁きとか、そういうものがたぶん好きだ。それに、フランス語やイタリア語が入ったような、洒落た横文字なんかも日本語よりよく見えている気がする」

「女はたぶんそういうの好きだね。ケーキの名前とか、むやみにそれっぽい横文字多いし」

「だろうね。男の僕からすると、なんだかこっ恥ずかしくてちょっと嫌なんだけどさ。女の子好みの言葉は、男にとってはいまひとつ心の琴線に触れないことが多いね。こういう対比でみても、ラノベにはダサイくらいのタイトルがちょうどいい、という感覚が少しは伝わるかな」

「ダサイくらいでいい……か。こういうのって、相手に合わせて言葉を選ぶ、っていうことなのかな」

「ああ、たぶん、そういうことにもなるんだろう。話す相手が小学生か大学生か、あるいは男か女かとかで、話す言葉も内容も自然と

変化するようにね。誰にでも同じ調子で話してしまうのは、極端なことをいってしまえば、時と場合をわきまえない間抜けだろう」

「うーん、ラノベのタイトル一つとっても、なかなか奥が深いものだね。あ、あとさ、ダサいを通り越して、いっそ幼児退行してるようなタイトルもたまにあるけど、そういうのはどうなの？」

「……たしかにそういうのもある。その場合は、小学生が好みそうなタイトルをつけて、『バカっぽい』という印象を逆に売りにしているんだと思う。高校生になってから、小学生の時に書いた作文を見直すと、その拙さが逆に面白かったりするだろう？ 自分ってバカだったんだなあ、って」

「ああ、そういうのもある。『誕生日』を『生誕日』って書いてたり」

「お笑いの世界にも、全然面白くないことを大まじめにやって逆に面白いと思わせる、なんて芸風もあるくらいだ。小説の世界に、バカっぽさを売りにするものがあるもおかしくない。そして、バカっぽいものと見ていると、それはそれで落ち着くこともある。これは歌の話になるけれど、コテコテのアニメソングが真剣さとはかけ離れているがゆえに気晴らしになる時があるし、バカになってはしゃぐという時にはそれをカラオケで熱唱してみてもいい。バカっぽさの演出も、一つの技だね」

「なるほど。考えてくといういろいろ見えることもあるもんだね」

「僕の考察が正しいという保証は何もないよ」

「いいのいいの。聞きたいがあったから。だいたい、絶対に正しい正解を求めちゃうのは、高校生の悪い所だよ。正解がある問題の方が、世の中ずっとずっと多いのに。ま、小中高と、正しいことしか教えられないからそうなたっちゃうのかもしれないけどさ」

「それは高校生がいうことじゃないな」

「はは、そだね。でもそれをいうなら桜庭くんのことでも高校生らしくないよ」

「ああ……よく言われる」

苦笑いする悠馬を見つつ、ふう、と一息。一番の話題は終わった。

さて、これからどうしようか？ あたしとしては、せっかく二人でいるのだから、このまま別れてしまうのはなんとなく惜しい。かといって、「丁度いい時間だし夕食でも一緒にどう？」なんて誘うような状況でもないし。

あたしがうだうだと悩んでいると、悠馬が立ちあがった。

「あ……」

帰っちゃうのかな？ と、河原に置いてけぼりにされた捨て犬の気持ちになりかけたとき、

「ねえ、展望台に行ってみない？」

「え……ああ、そういえばそういうのがあったね」

このデパートは、何を思ったのか、屋上よりも少し高い所に展望台を設置しているのだ。展望台といっても、五メートル四方のこじんまりとしたスペースで、なんともいえない物悲しい所。正直、何のために作ったのかよくわからず、足を運ぶ客も多くない。

ともあれ、あたしたちは連れだってテクテクと歩き、その謎スポットへ。今のところ、このスペースにはあたしたちだけだ。

「うーん……まあ、それなりに景色はいいのかな。でもなあ……」

これで、遠くに山なり海なりが見えていたらもう少し景色もよいのだろうが、見渡す限り灰色のビル街が続いている様には特に感慨もない。高い所が好きな人にはいいのかもしれないけれど、あたしとしては、こんなもの見せられてもなー、と首をひねってしまう。

「これって、何か意味があるのかな？」

「ま、ここにたいした意味はないんだろう。それでも、人とはとにかく高い所が好き、という一面がある。意味はなくともとにかく高く！ ってね。東京スカイツリーなんてその象徴だろう。「高い」すなわち「素晴らしい」ってさ」

「無意味だねー」

「しかし、こういう名言もある。『そこに山があるからさ』。登山

家のジョージ・マロリーさん……だったかな。なにもかもに論理的で合理的な意味を求めることもない」

「それもそうか……。ところで、ここに来たのは初めて？」

「いや、二度目かな。ここができた頃に一度来て、こんなもんか、って思ってたそれきりだよ」

「あたしもそう。これが二度目。わざわざ来るところじゃないかなー」

「あ、もしかして、こんなところに誘われてうんざりしてる？」

「え？ いや、そうじゃないよ。特別感慨深い所じゃないってだけ」
「そっか。少なくとも悪い印象はないようで良かった」

悠馬は引きつり気味の笑みを作り、それから一度周囲をぐるりと見回した。景色はどれも似たようなものじゃない？ と思いつつもあたしもそれに続く。すると、案外夕日がきれいに見えていることに感心した。ビルの向こうに沈んでいく太陽。どこかでまた朝日になる夕日……って、何考えてんだろうね。

展望台以外の屋上にいる数少ない人たちも、それが狙いだっのか、夕日を眺めたり写真を撮ったりしている。どうでもよいと思っ
ていたけれど、そう捨てたものではないのかな。

好きな人の隣で夕日を眺める。うん、悪くないね。

今日はいいことがあった、ということと満足していたあたし。でも、悠馬はそれでは気がすまなかったらしい。

「御影さん」

「ん？」

隣を見ると、オレンジの光に照らされながら、悠馬も同様に夕日を眺めている。

「……あのさ、さっきも言った通り、男はここぞという時には特にひねりのないストレートな言葉を使いたがる」

「……うん」

「ついでに言えば、タイミングを読むのも下手だ」

「……ええと、それで？」

これはなんの前振り？

悠馬は若干恥ずかしげにはにかみながらこちらを振り向く。夕日のせいじゃなく、少し顔が赤い？

あ、っと思った時には、悠馬は陽光に澄んだ瞳をきらめかせながら、あたしに告げた。

「御影さん。君が好きだ。僕と付き合ってくれ」

その瞬間、いきなりすぎる展開への不満なんてどうでもよくて、体中が燃えるように熱くなった。

「あ……」

うわ、やばい、どうしよう、うれしい。

答えは決まっている。でも、なんだろう、なんて言葉にすればいいんだろう？ あんな前振りをされたら、何か特別なことをしなくてはいけないような気がしてしまう。女の子らしく、なんて。いや、別に深く考える必要はなくて、普通に返事をすればいい。「うん」とか「はい」とか「喜んで」とか。

悠馬がじっとこちらを見つめてくる。あまり長く待たせるわけにもいかない。

あたしは口を開いて、でも言葉が出なくて。

「……どう、かな？」

悠馬が不安そうに問うてくる。そんな苦しげな顔しなくていいのに。

口をぱくぱくと開閉させること数秒、あたしは妙なことを閃いていしまつて、後々悶え死にしそうになるほど後悔することを口走ってしまった。

「……あ、あたしを月に連れてって」

「は？」

悠馬が、あたしの意味不明発言にきょとんとしている。まあ、そりゃそうだよね。

「ええと、じゃあ、あたしに、雲の上の春の風景を見せて」

「……？」

悠馬はさらに困惑する。あたしはなんだかいたたまれなくなってきた。このシチュエーションだけでも十分なのに、余計に恥ずかしくなってきた。

「……だから、つまり」

「……うん」

あたしは、一呼吸置いた後、ここまできたらもう引き下がれん、と思い切って言い放った。

「……あたしを思い切り抱きしめて、ってこと！」

悠馬は目をパチパチと瞬かせた。あたしがあまりにも突飛なことを言ったせいだろう。自分で言うのもなんだけれど、これは恥ずかしすぎる。昔聞いた歌の歌詞なんて真似しなければよかった。

「くっ、くくく」

悠馬、腹を抱えて笑いだす。

「あ、笑うなっ。こっちだって必死だったんだからっ」

いや、まあ、笑うよね、あれは。あたしもおかしくなって笑っているし。半分は恥ずかしさの誤魔化しだけど。

「いや、でも、うん……なんていうか、すぐ女の子らしい言葉だと思う、よ？　なんていうと、最近じゃあ差別発言なのかな？　だとしたらごめん」

「いや、別にいいよ。男の子があんなこと言い出したら、正気を疑うもん」

かといって、女の子が言うのも夢見がち過ぎるかもだけど。

降りしきる橙の光線の中、二人してひとしきり笑いあった後、悠馬は照れくさそうな表情のまま、いくらか居住まいを正した。

「ええと……本当に、いいの？」

「え……あ、うん。……いいよ」

「じゃあ……」

悠馬はあたしの背に両腕を回し、おっかなびっくりといった感じであたしの体を抱きしめた。うん、まあ、なんていうか、こういうのも、いい、よね？

誰かに見られていたら恥ずかしくてやってられないとか、付き合い始めからこんなことしてこれからどうなるんだろうとか、ちょっとだけ頭をかすめたけれど、すぐにどうでもよくなって忘れてしまった。

今はただ、どこかへ飛んでいってしまいたいほどなのふわふわした気持ちの赴くままに、悠馬をきゅっと抱きしめ返した。

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9625x/>

告白の言葉

2011年10月27日02時10分発行